



edited by dr. masato mugitani
vol.5-no.9

石田天海のカード奇術（1）

麦谷真里

（まえがき）「天海の講習ノート」という冊子があります（写真856）。手書きのコピーを簡易製本したもので、著者は、名古屋アマチュア・マジシャンズ・クラブの会員であった大矢定義氏（故人）です。1981年の刊行ですから、天海の死後10年ほど経ってから出たことになります。内容は、大矢氏が名古屋の石田天海邸で、月に2度行われた講習に基づいてメモされたものです。

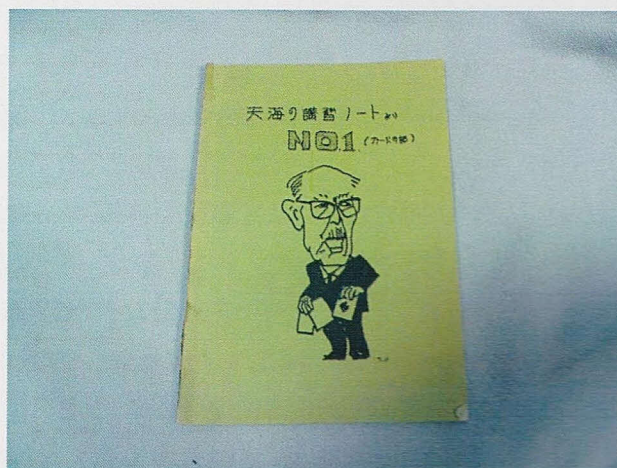


写真856

「No.1」と書いてありますが、No.2 以降が刊行されたかどうかはわかりません。しかし、大矢さ

んのことですから、おそらく続けて刊行されたと思います。「大矢さんのことですから」と書きましたが、それは、大矢さんが私の刊行する“masquerade part I”の購読者だったからです。雑誌を送付すると決まって旬日を経ずして大矢さんから質問の葉書や手紙が届きます。私は、その都度、丁寧に返事を出しておりましたが、高木重朗氏は、同様に著書に関する質問を大矢さんから受けても、ほとんど回答はしておられませんでした。それは、高木さんの場合は全国から山のように問い合わせが来るからで、そもそも、超多忙な高木さんが、その質問のすべてに目を通して回答する物理的余裕も時間的余裕もなかったからです。

たとえば、高木さんからこんな話を聞いたことがあります。大矢さんから、「解説には、『カードを伏せて置く』と書いてあるが、これは表向きで置くのか裏向きで置くのかどっちですか？」と質問が来たそうです。高木さんは、憮然として、「伏せて置くんだから裏向きに決まっているだろう」と私におっしゃっていました。

このエピソードを紹介したのは、大矢さんの質問は、このように細かいことが多く、したがって、大矢さんの書かれた、この「天海の講習ノート」は、大矢さんが重要だと思った点をかなり細部に亘ってメモしてあるということを意味しています。ただし、私の所有する「天海の講習のノート」は、大矢さんから直接購入したのではなく、これを名古屋名鉄百貨店の手品用品売場のディーラーが販売していて、それを購入された方から譲り受けたものです。

読んでみると、これは、まさに大矢さんの個人メモというか備忘録で、一度天海から習った者が参照に読むのはいいのですが、まったく初めての人が、これで天海のカード奇術を会得するのはきわめて困難です。理由はいくつかあります。ひとつめは、全体像が書かれていないので、いくつかのステップから構成されている手品か流れが不分明なこと、ふたつめは、実際のハンドリングがわからないこと、3つめは、これは解説書ではないので、メモの内容そのものが間違っている場合は、書いてある通りにやっても奇術ができないこと、です。

石田天海(1889年—1972年)がアメリカ合衆国での職業奇術師活動を辞めて日本に帰国したのは1958年です。したがって、14年間主として名古屋に居住されていたこととなります。私も1967年から数年間名古屋に住んでいましたから、石田天海と同じ空の下にいたのですが、なぜか、一度もお会いしたことがありませんでした。何かの奇術大会で、ステージの上で小品を演じられたのを拝見したくらいで、個人的な知遇を得たことはありません。理由はわかりませんが、当時、たとえば名古屋アマチュア・マジシャンズ・クラブは、私のような高校生には敷居が高く、その種のクラブに所属していなかったのが遠因かもしれません。いまから考えるともったいないことをしました。

さて、この冊子がそんなに沢山配布されたとも思えませんので、せつかくの石田天海のカード奇術を記録に残しておこうと思って、今回私が咀嚼して実際に演じることができるよう解説します。特に大きく異なる部分は、観客に見せるように演出とハンドリングを変えたことです。カード奇術そのものの構成や骨格は変えていませんので、石田天海の考え方は損なわれていないと確信しています。今回の解説にあたって、言うまでもないことですが、貢献したのは石田天海と大矢定義氏のお二人です。

1. 天海の「客とやるカード」

タイトルは、すべて冊子の通りにしました。奇術雑誌に発表することを前提にされたわけではありませんが、タイトルが野暮ったいのは止むを得ません。

[現象]

客とマジシャンとが同じようにカードを扱いますが、客は何度やっても同じようにはできません。

[準備]

ありません。

[やり方]

冊子には何も書いてありませんが、これは全3段からなる手順です。

第1段:『マジシャンと同じようにやってみる』

- ①デッキから、スペードのAから5までの5枚のカードとダイヤのAから5の5枚のカードを抜き出して客に示し、どちらか好きなスートの5枚を選んでもらいます。ここでは、解説の便宜上、マジシャンがスペード、客がダイヤを選んだとします。
- ②まず、マジシャンがスペードのAから5をトップから順にA、2、3、4、5となるように一旦揃え、全体を表向きにして客に示し(写真857)、客の持っているダイヤのカードも同じように揃えてくれるように頼みます。

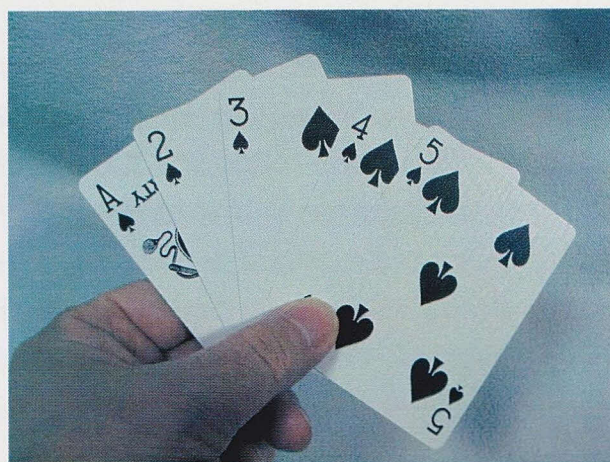


写真857

- ③客に、これからマジシャンと同じようにやってくれるように言います。まず、パケット全体をそろえて裏向きにひっくり返します。一番上がAになります。5枚をよく広げ、真ん中(上から3枚目)のカードを抜いて、トップに載せます。客にもそのようにしてくれるように頼みます。
- ④次に、ボトムのカードを取って、これを真ん中に入れます。客にもそのように指示します。
- ⑤トップ・カードを取って、ボトムに回します。
- ⑥5枚のパケットを裏向きでよく揃えます。トップ・カードをテーブル上に裏向きで置きます。次のカードをパケットのボトムに回し、3枚目のカードをさきほどテーブルに出したカードの上に裏向きで載せます。その次のカードをボトムに回し、その次のカードをテーブル上のカードに裏向きで重ねます。その次のカードもボトムに回し、その次のカードをテーブル上のカードに重ねます。

左手に残った1枚のカードは、そのままテーブル上のカードの上に裏向きで置きます。一種のダウン・アンダーです。

- ⑦「それでは、あなたが私と同じようにやったかどうか、点検してみましょう」と言って、テーブル上のポケットを取り上げて表向きにして点検します。ボトムからトップ方向へ、A、2、3、4、5の順に並んでいます(写真858)。



写真858

- ⑧「素晴らしいですね。上手にできたようです」と客を誉めます。

第2段:『今度は同じようにできない』

- ⑨もう一度やってみましょう。5枚のカード裏向きでトップからA~5の順に揃え直します。真ん中のカードを抜いてトップに置きます。ボトムカードを取って、真ん中に入れます。
- ⑩トップからボトムに、はっきりと1枚ずつ2枚のカード送りますが、2枚目のカードをボトムに回したら、その上にブレイクを作っておきます。そして、その次の3枚目のカードを同じようにトップからボトムに回す仕草で、実際は、ブレイクの位置のボトムから2枚目に入れてしまいます。
- ⑪これを繰り返します。トップからボトムへ2枚送ります。その次の3枚目のカードはボトムカードの上に入れます。
- ⑫次に、トップから1枚ボトムに回します。これで、マジシャンのカードは、トップからA、2、3、4、5の順になっていますので、全体を表向きにひっくり返して、客に順序が変わっていないことを示します。ここで、客のカードを点検すると、順序がそろっていません。

第3段:『最初からもう一度』

- ⑬「おかしいですね?もう一度やってみましょう」。マジシャンの5枚を、裏向きにして、上から、A、2、3、4、5の順にします。「いいですか?上からA、2、3、4、5です」と言いながら、左手から右手にカードの順序が変わらないように取って行きますが、このとき、Aの下に2、その下に3を取るとき、右親指で一番上のAを左に押して左手に戻し(写真859)、同時に左手のボトムカードをバックルして上の2枚を同時に、「4」と言って右手取ります。左手は残った5を指でパチンと弾いて、「5」と言います。そして、客にも、自分の5枚のカードを上から順にA、2、3、4、5と揃えるように言います。この時点でのマジシャンのカードは上から、2、3、A、4、5です。



写真859

⑭マジシャンは、5枚のポケットを裏向きで拵げ、真ん中のカードをトップに持って来ます、客にも同じようにしてもらいます。次に、ボトムカードを取って真ん中に入れます。さらに、ボトムカードを取って真ん中へ入れることをあと2回繰り返します。これで、マジシャンの5枚は、トップから、A、2、3、4、5の順になりました。全体を表向きにしてカードの順を示します。客のカードを点検すると、そのような順序になっていません。「同じように行なうのはなかなか難しいようですね」と言って終わります。

[コメント]

いわゆる“Do as I do”ものですが、難しい技法を使わず構成されているところが優れています。ただし、カードの操作が複雑なので、客のほうも一瞬(自分が)間違えたかな?とってしまうところが難点です。そういう観点からは、ギャフ・カードを1枚使いますが、ケン・ブルックの手順のほうが普通の観客相手には演じやすいです。

2. 天海の「いつも客のカードが」

[現象]おおよそ不可能と思われる状態から客の選んだカードを2回当てます。

[準備]

このノートが天海の講習のメモであることはすでに述べましたが、重要であるにも関わらず、メモにまったく書いてないことがけっこうあります。それは、おそらく、大矢さん自身が、メモに書くまでもないと思われたからです。しかも、このメモは、当然といえば当然ですが、このカード奇術を不思議に演じることに主眼があり、おそらく天海が語ったであろう、なぜ、この作品を考えたか、とか、技法は誰のものとか、誰のカード奇術に影響を受けた作品だとか、おおよそ私が知りたい周辺のことは何も書いてありません。天海はバーノンと親しかったので、たとえば、バーノンはこう演じていたとか、そのような瑣末なことを知りたいのに、そうした情報は一切収録されていません。

話が横道に逸れてしまいました。このカード奇術も、講習メモのどこにも書いてありませんが、実は52枚のデッキではなくて、52枚+2枚のジョーカーの計54枚で演じます。しかも、ジョーカーのうち1枚はショート・カードであることが後で判明します。さらに両面テープの必要なことも途

中で突然わかります。

①デッキ(52枚+ジョーカー2枚の計54枚)からダイヤのカードをすべて抜き出して、次のようにセットします。まず、表向きでA~3の3枚を一山、次に、4~9の6枚を一山、最後に10~Kの4枚を一山に重ねます(写真860)。

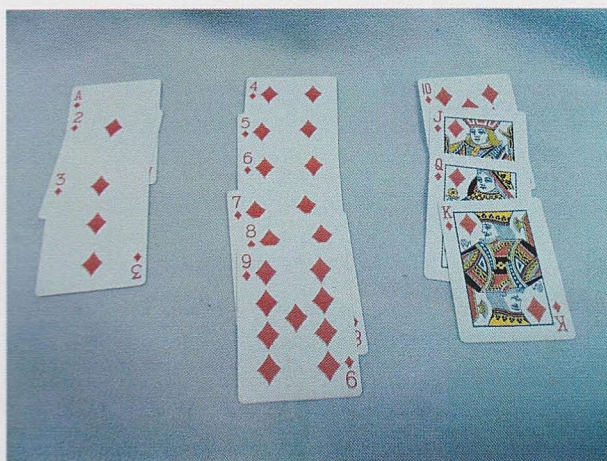


写真860

次に、それぞれの山の上に、やはり表向きで、黒いカード(♠か♣)をダイヤの3の山の上に3枚、ダイヤの9の山の上に6枚載せます(写真861)。

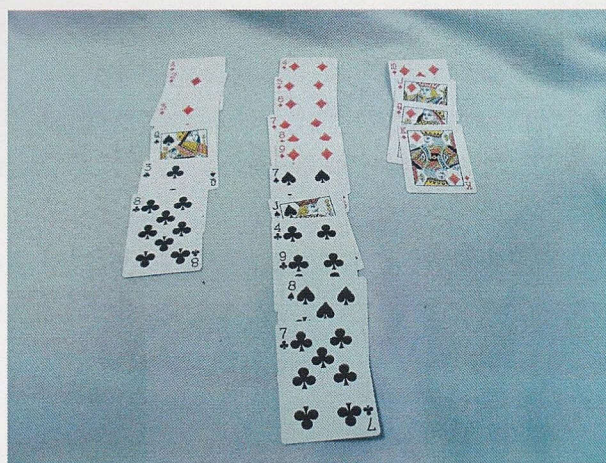


写真861

ダイヤのA~3を含む6枚のカード群の上にダイヤの4~9を含む12枚のカード群を載せ、この18枚のパケットの上にダイヤの10~Kの4枚を載せます。そしてこの22枚を輪ゴムで止めます。残りのカードはこの輪ゴムパケットの表側に載せ、一枚だけ裏側に持ってきて輪ゴムを隠します。この状態でセットしたデッキをカード・ケースに入れておきます。

②左手の甲に1cm四方くらいの両面テープを貼りつけておきます。

③2枚のジョーカーのうち1枚をショート・カードにしておきます。

[やり方]

第1段:客のカードを当てる

- ①デッキをカード・ケースから出して、輪ゴムが見えないように注意しながら、輪ゴムで縛られていないカードをオーバーハンド・シャッフルして、デッキを切り混ぜたように見せます。その後で輪ゴムをひそかに外すのですが、これは要するに予めセットした22枚を温存しながらシャッフルするということですから、昔は、このように輪ゴムで留めたかもしれませんが、最近では流行らないことなので、[準備]の項ではそのように書きましたが、22枚のセット部分を輪ゴムで留める必要はなく、その22枚をトップにセットしたまま残りのカードをシャッフルすればそれで十分です。ダイヤのAがトップ・カードです。
- ②デッキを裏向きに持って、「これからあなた(客)にやってもらうことを説明しますから、よく聞いてください。簡単です。最初に1枚ずつ並べます」と言って、上から順に1枚ずつ、横に6枚のカードをテーブル上に並べます。左から3枚がダイヤのカードです。次に、「この上に、2枚ずつのカードを配ります」と言って、カードの順序を変えずに、2枚ずつのカードを置きます。
- ③さらに、「その次は、3枚のカードを置きます」と言って、やはりカードの順序を変えずに最初の山のところに3枚置いたあと、「あとは同じですから省略します」と言ってカードは配りません。
- ④「その次は順序から行けば4枚ですが、4枚ではなくて2枚置きます」と言いながら、順序を変えずに2枚のカードを最初の山だけに配ります。ただし、このとき、2枚のうち下になっているほうのカードは、やや下に突き出るように置きます(写真862)。



写真862

- ⑤右手で、左から3番目の山を取って、左手に残っているポケットの下に入れます。次に左から4番目の山、5番目の山、6番目の山をそれぞれ取り上げて、左手のポケットの任意の場所に入れます。ただし、ボトムから3枚より上に入れるようにします。
- ⑥残っている左から2番目の山を左手のポケットの下に加えます。次に、1番目の山の最後に2枚置いたカードのうち手前に突き出ている下側のカードを右手で取り上げて、このカードで1番目の山のすべてをすくって取り上げ、左手のポケットの上に載せます。
- ⑦この状態で、デッキを点検すると、トップから7枚と、ボトムから6枚がダイヤのカードになっています。
- ⑧ここで、デッキを客に渡し、「いま、私が行った通りに配ってみてください」と言います。まず、最

初に6枚配り、その上にカードの順序を変えずに2枚、続いて3枚、さらに2枚ずつ配るのです。最後に手元に残った6枚は、1枚ずつ山の上に配ります」と言います。すると、テーブル上に6つの山ができますが、それぞれの山のトップとボトムがダイヤのカードになります。

- ⑨「できあがった6つの山から、どれでも好きな山を選んでください」と言います。客が好きな山を選びます。「では、その山の中から好きなカードを1枚引いてください。どれでもかまいません」客がトップやボトムのカードを選んだら、それはダイヤのカードです。そうでなければ、何のカードかわかりませんが、ここで知る必要はありません。
- ⑩「次に、そのカードの表を見てよく覚えてください」と言います。客が覚えます。「覚えたら、そのカードを別の山の上に戻してください。どの山でもかまいませんが、カードを選んだ山以外の山に戻してください」客がそうします。「最後に、山をどのような順序でもいいですからすべて集めてください」と頼みます。この作業によって、客の覚えたカードは2枚のダイヤのカードに挟まれることになります。
- ⑪客からデッキを受け取り何気なく数回カットします。「あなたの覚えたカードを探します」と言って、カードの表を見ながら客のカードを探します。2枚のダイヤのカードで挟まれているのが客のカードです。ただし、AとKの間のカードは最初から挟まれていたもので、それは客のカードではありません。また、客がダイヤのカードを選んでいた場合は、3枚並んだダイヤのカードの中央が客のカードです。
- ⑫いくつか例を述べます。たとえば、客が右から2番目の山の中からクラブのJを抜いて覚えて、それを左から2番目の山の上に戻してから、6つの山を適当に集めて1回カットしたとします。このデッキを表向きに拵げると、2枚のダイヤのカードに挟まれたカードは、 $\diamond A$ と $\diamond K$ の間にある1枚と、 $\clubsuit J$ だけです。したがって客の選んだカードが $\clubsuit J$ ということがわかります。
- ⑬もうひとつの例は、客がダイヤのカードを選んだ場合です。客が右端の山のトップカード(\diamond)を選んで覚え、それを左から4番目の山の上に置いて、6つの山を任意の順に重ねて集め1回カットしたとします。デッキを表向きにして点検すると、ダイヤのカードが3枚連続して並んでいる箇所があります。この3枚のダイヤのカードのうち、中央のダイヤのカードが客のカードです。
- ⑭客のカードがわかったら、表を見ながら、まず、ダイヤ以外のKを1枚裏向きでテーブル上に出します。次に、ショート・カードのジョーカーを探して、これも裏向きで、いま置いたKの右横に置きます。続いて、客のカードを含めて12枚のカードをひそかに数えてテーブル上に出ているKの下側に裏向きで置きます。客のカードがトップです。最後に、残ったカード群をすべて、ジョーカーの下側に裏向きで置きます(写真863:表向きのカードは本来すべて裏向きです)。
- ⑮この状態から、まず、左手で裏向きのKを取り上げ、表向きにしなが、「あなたの選んだカードはこれですか?」と訊ねます。客は否定しますので、左手を戻しながら、甲を客のカードの山に着け甲に貼った両面テープに客のカードを着けます。同時に、右手で裏向きのジョーカーを取り上げて表向きにして、「では、このカードですか?」と客に訊ねます。客はこれも「違う」と否定します(写真864)。
- ⑯そこで、左右両手のカードを再びテーブルの上に戻しながら、左手の甲が上になるようにする

と、左手の甲に客のカードが表向きになって現れます。客はびっくりします(写真865)。



写真863



写真864

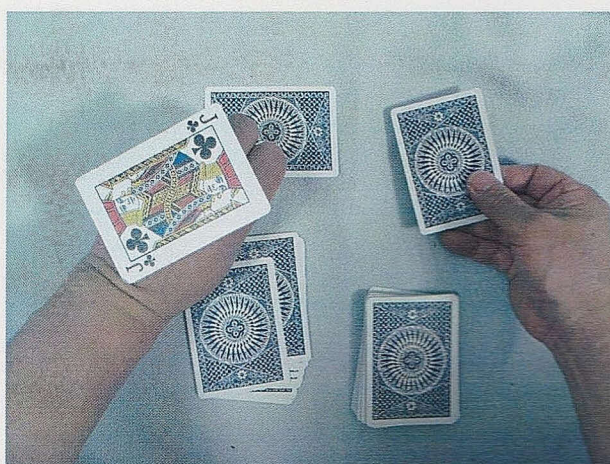


写真865

⑰客のカードを左手の甲から剥して左下の11枚のパケットに戻し、その上に左上のK、さらにその上にショート・カードのジョーカーを載せます。これで第2段のセットができました。

第2段:2枚目の客のカードも当てる

- ①ショート・カードのジョーカーが載った14枚のポケットをテーブル上に拡げて(リボン・スプレッドして)客に1枚のカードを選んでもらいます。客が選んだら、ポケットを揃えて、その上に残りのカードを載せませんが、このとき、ショート・カードの上に右親指でブレイクを作っておきます(写真866)。



写真866

- ②客に引いたカードを覚えてもらっている間に、右手のデッキを左手にヒンズー・シャッフルし始めます。客に適当なところでストップをかけてもらい、ストップのかかったところに客のカードを返してもらいます。ただちにヒンズー・シャッフルを続けますが、このとき、最初にブレイクから下のカード群を客のカードの上に落としてしまい、そのあとでヒンズー・シャッフルを続けます。結果として客のカードはショート・カードのジョーカーから下へ13枚目の位置に来ていることになります。
- ③デッキを一旦テーブルの上に置きます。「今度こそ、あなたのカードがどこにあるか誰にもわかりません」そう言いながら、デッキを左手に持って右手で手前の端をリフルします。ショート・カードのジョーカーのところで止まりますので、そこでカットします。
- ④「いつも、ジョーカーが教えてくれるのです」と言って、まず、ジョーカーを表向きにして、次いで、その下のカードを開けてKであることを示し、「これがキングだったら、ここから13枚目にあなたのカードがあるとジョーカーは言っています」と言って、最初のKを含んで13枚数えて行くと、13枚目に客のカードが出てきます。

[コメント]

この手品は、おそらく、この通りに演じられたのだと思いますが、いくつか風変わりな点があります。まず、最初のダイヤのセットですが、ダイヤでさえあればいいわけで、Aから順にKまでセットする必要があるのは、AとKの間のカードが客のカードでないことを同定するときにはしか使ってないので面妖です。また、セットを輪ゴムで縛る必要がないのはすでに書きました。後半も一度出たKとジョーカーとがまた一緒に出て来るのですから、きっと何かストーリーがあったのだと思います。客のカードを当てるのに、なぜこんな冗長な手順を行なうのか不思議です。

3. 天海の「両側のカード」

[注]「天海の講習ノート」では、3つ目に書かれているのは「3つの山」という一種のトライアンフ現象のカード奇術ですが、デッキを片手に何回も読み直して何度もやってみましたが、読解も理解も非常に困難で、デッキの状態がなかなか大矢さんの書かれている図のようにはならず、また、クライマックスも、これで不思議なのか？と思うような塩梅で、私が勝手に解釈するのも憚られるので掲載を断念しました。次の「両側のカード」はノートでは実は4番目のものです。

[現象]客の覚えたカードの両側のカード(2枚)をマジシャンが当てます。

[やり方]

- ①デッキを客によくシャッフルしてもらいます。客が満足したらデッキを受け取って、何気なく表を見て、「よく混ぜましたね」と言いながら、トップから4枚目のカードとボトム・カードとを覚えます。ここでは、解説の便宜上、トップから4枚目に◇6、ボトムに♡4があったとします(写真867)。

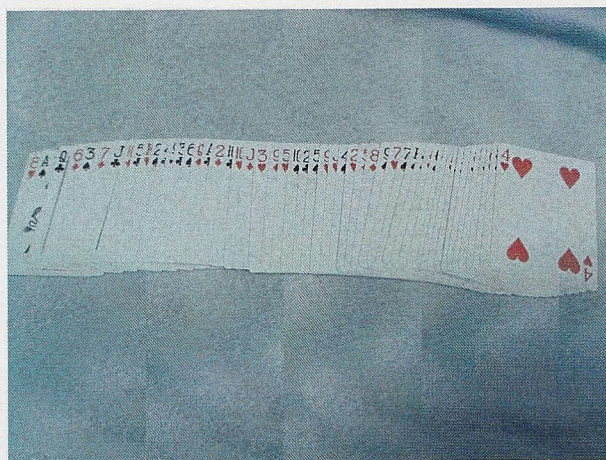


写真867

- ②デッキを裏向きで左手に持ち、右手で上半分を持ち上げて、ヒンズー・シャッフルしますが、1枚のカードを右半分のトップから左手に取ったところでシャッフルを止めて、右手の半分を左手の半分の上に置きます(写真868)。



写真868

- ③デッキを左手に裏向きで持って、トップ・カードをダブル・リフトして客にだけ表を見せ、「このカードをよく覚えておいてください」と言います。たとえば、このカードが♠7だったとします。このダブル・リフトした2枚を一旦、デッキの上に戻してから、トップ・カードだけをテーブル上に裏向きで置きます。そして、何気なくデッキを1回カットします。これで、♠7の両側に、さきほど覚えて置いた◇6と♥4とが来たことになります。
- ④デッキを裏向きに持ったまま、テーブルの上のカードを裏向きのままデッキの中に入れます。入れるとき表は見せないで、「このカードは覚えていますね？」と念を押します。また、このカードを♠7の近辺には入れないように注意します。2、3回カットしてから、客にデッキを渡し、表向きに拡げて、さきほど覚えたカードとその前後のカード2枚の合計3枚を抜きだして、マジシャンに見えないようにして両手で持ってくれるように頼みます。この3枚のカードは、◇6と♠7と♥4です(写真869)。

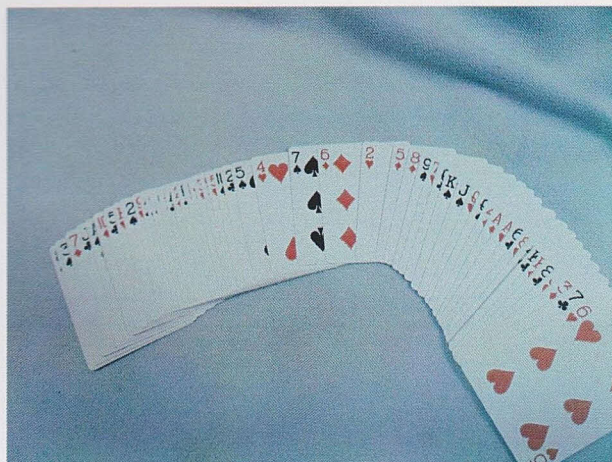


写真869

- ⑤客の準備ができたら、「あなたのカードは何でしたか？」と訊ねます。客が「スペードの7」と答えますから、「それでは、その両側のカードを当てましょう」と言って、おもむろに考える風情で、「ダイヤの6とハートの4です」と両側のカードを当てます。

[コメント]

マジシャンからすると、こんなカード奇術で客が驚くか？と思いますが、客は十分に驚きます。それは、やはり、デッキを最初に客に思う存分シャッフルさせるからです。デッキのトップからダブル・リフトするところは、「天海の講習ノート」では、まったくちがった方法がとられていて、それは、マジシャンの唾液をひそかにカードにつけて、トップ・カードと2枚目のカードとをくっつけてしまう方法です。カードを唾液でコントロールする方法は、Harry Lorayneも使っていて、私も実際に見せてもらったことがありますし、彼の著書にも解説してあります。ひそかに行なえば、非常にパワフルな技法になりますが、唾液をいっとうやってカードにつけるか、など、なかなか微妙な問題があります。指を舐めるのは、日本でも欧米でも行儀の良いことではありませんので、今回は敢えて採用せずに、ダブル・リフトを使いました。基本的な効果に差異はありません。また、「講習ノート」には、マジシャンが先に、デッキから別の3枚を抜き出して、「このようにあなたの覚えたカード

の両側のカードを含めた3枚のカードを探して抜き出してください」と例を見せて言うのですが、私は、この時点では、もうマジシャンがデッキに触ったり表向きにしたりしないほうが良いと思いましたが、そのような演出は取りませんでした。ただ、「講習ノート」ではそのようになっておりますので、書いておきます。

4. 閑話休題

もう紙数がなくなって来たので、天海のカード奇術は、次回に続けることにします。ちなみに、「天海の講習ノート」に収められているカード奇術のタイトルだけを列挙すると、次の通りです。

- ①客とやるカード
- ②いつも客のカードが
- ③3つの山
- ④両側のカード
- ⑤ケースの中のカード
- ⑥客のカードを当てる法
- ⑦水と油
- ⑧なくなったクィーン
- ⑨3枚同じカード
- ⑩誰も起こらないでしょう
- ⑪私のマネをしてごらん
- ⑫⑪の別バージョン(ギャフ・カードを使わない方法)
- ⑬チェンジング・カード
- ⑭ミステリー・フォア・エーセス
- ⑮客のカードを1枚抜く法
- ⑯移動するエース
- ⑰分けられないカード
- ⑱フォア・エーセス
- ⑲ファン・カード
- ⑳セブン・カード
- ⑳+①ファントム
- ⑳+②アルディニーのカード

このうち、⑲以下はステージで行なうカード奇術です。最後の2つは奇術用具も使いますので、「天海のカード奇術」というよりも、「カードを使った奇術の天海の演出(見せ方)」と言ったほうがいいかもしれません。

ところで、すでに述べたように私自身は石田天海の警咳に接したことはありません。石田天海に関する本としては、その半生を自分で綴った「奇術五十年」があります。この本は朝日新聞から刊行されたもの(1961年)と、それを増補・訂正して新たにユニコン貿易が500部限定で出し

たもの(1975年)、それに、朝日新聞版を底本として再編集して日本図書センターから出されたもの(1998年)の3種類があります。私が所有している本は、ユニコン貿易から出た500部限定のもので、定価は3500円ですが、私は古本屋から5000円で購入しました(写真870左)。「奇術五十年」は、手品関係のものを扱っている古書店では前述のように5000円もしますが、街の普通の古本屋なら、そもそも需要がないので、1500円前後で売っています。この本が書かれた時点では天海の奇術歴は「五十年」だったのですが、結果として、六十年の奇術人生でした。



写真870

私は、このほかにも“THE THOUGHT OF TENKAI”はもちろんのこと、「天海のカードマニピュレーション」も持っていますし、「天海とおきぬの写真集」なども所有しております。また、ダイ・バーンの遺品のオークションで購入した、天海からバーンに贈られた本(天海の署名入りであるばかりでなく、バーン自身が天海から贈られたものであることを書いて署名してあります)なども所蔵しておりますが、いずれも、書庫のどこにあるかすぐに探せなくて写真を掲載できません。

「奇術五十年」は素晴らしい本です。明治時代の、日本の奇術界がどのようなものであったのか俯瞰できますし、天海自身が松旭齋天勝一座の一員で渡米したため、内側から見た当時の奇術一座の状況や天勝一座の公演に対するアメリカ合衆国での反応についてよくわかりとても重宝します。私が感動したのは、天勝一座がニューヨークの一流劇場で上演することになったときに、ニューヨークの舞台監督にそれまで2時間かけて演じていて評判も良かった公演をたった22分で演じるように練習させられた話とか、初めて観たハワード・サーストンの舞台に驚きすぎて終演後椅子から立てなかったことなどです。いまでも、ニューヨークやラス・ベガスのジョー・ビジネスの世界で生きて行くのは並大抵の努力ではありませんが、100年も前からそうだったとは思ってもありませんでした。次回も「奇術五十年」については触れるつもりです。

これは、aficionado の Vol.5-No.9 です。

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

Eメール・アドレス: masqpart4@aol.com

これは、限定100部のうちの09/100です。

(2020年12月)